

ヴァイシェシカ・スートラ覚書 II

本 多 恵

Vaiśeṣika Sūtra は古い註釈書が失なわれたので、現存の註釈では意味が変わってしまっていることもあるし、時にはスートラ本文まで正しく伝えられていないと考えられる箇所すらある。但し、Brahma-sūtra や Mīmāṃsā-Sūtra とはちがって、本文だけで意味を知り得る場合が多いので、何とか理解出来る。また、Candrānanda の註は他の註に比して可成り正しくスートラ本文を伝え、その註釈も本文を理解するのに有益である場合が多い。それにも拘わらず、意味が未だ確定しにくいと考えられている箇所に III. 24 以下のアートマン論がある。これを今一度討することとしたい。

prāṇā-'pāna-nimeso-'mneṣa-jīvāna-manogati-'ndriyāntaravikārāḥ

...sukha-duḥkhe-'cchā-dveṣa-prayatnās cā 'tmano līṅgāni...(III. 2, 4).

*...sukha-duḥkhe icchā-dveṣau prayatnās ce 'ty ātma-līṅgāni (C) parā-'tmani līṅgam, sukhā-, dayāś ca (T) Kiraṇāvali p.88 ; Nyāyakandalī p.83 は上引の U 本と一致する。Vyomavati p.147 は ātmano līṅgāni の代りに ātma-līṅgāni とする。

〔訳〕 呼吸・吸気・閉目・開目・生命・心の動き・楽・苦・願望・憎・意志的努力は自我（存在）の証相である。

dravyatva-nityatve vāyunā vyākhyāte (III. 2, 5).

〔訳〕（自我が）実体であり恒常であることは、風（の解説）によって解説された。

*¹yajñadatta iti sati*² sannikarṣe pratyakṣā-'bhāvād dṛṣṭam līṅgam na vidyate (III. 2, 6).

*¹T は yajñadatta の前に ahaṃ を置く。*²T と U は sati を欠く。

〔訳〕（問）接触があった時、「ヤジュニャダッタ（は生氣・楽等を有する）。」と感官知することがないから、（自我には）可見的証相は存在しない。

〔註記〕「例えば、眼に見える事物との接触があった時、〈これはヤジュニャダッタである〉という感官知があるが、〈この自我は呼吸等・楽等と結びついている〉という認識はそうには生じない。問。どのようにして、非可見のものと結びついた生氣等が自我の証相なのか。このことを〈生氣等は可見的証相でない〉と言う。」(C) この註釈によれば、本文は「接触があった時、ヤジュニャダッタであるという感官知があるが、そのような感官知がないので、生氣等は自我の可異

的証相でない。」となるのであろう。これは反対論の説明としてはわかり易いが、ストトラ本文からすれば、やや困難な読み方であると考えられる。むしろ単純な「感官と対象とが接触する場合に、身体などを離れた自我を直観することがないから」という T の解釈の方が本文の読み方としては正しいかもしれない。

sāmānyato dr̥ṣṭāc cā 'viśeṣaḥ (III. 2, 7).

〔訳〕 (問) また、(自我の特徴は身体にも) 共通に見られるから、差異がない(ことになる)。

〔註記〕「動力因のない呼吸等と依り所のない楽等とは発生しない。だから、これら(呼吸等・楽等)には何らかの動力因や基体が存在する筈である。故に、この(動力因や基体を有することが) 共通に見られることからまた、虚空等を排除しないことになるから、(自我と虚空とは) 差異がない(ことになる)。何故なら、これら(虚空等)もまた原因となることが可能であるから。」(C)

tasmād āgamikam* (III. 2, 8).

*āgamikaḥ (U)

〔訳〕 (問) 故に、(自我の存在は) 伝承聖典に基づいている。

〔註記〕「ウパニシャッドに説かれているから」(U)「風聞に過ぎない」(C) 恐らく U の解釈が正しいであろう。

aham iti sabda*-vyatirekān nā 'gamikan (III. 2, 9).

*śabdasya (U).

〔訳〕 (答) 〈私〉という(他の実体とは)別個の語(で示される)から、(自我の存在は) 伝承聖典に基づいているのではない。

〔註記〕「〈私〉という地等とは別異(bhinna)の自我という実体を対象とせる語と基体を一にするから、〈私は呼吸等を有する。私は楽を有する。〉と(言う)。故に、呼吸等を証相とするから、伝承聖典(のみ)に基づいているのではない。」(C)

yadi ca*¹ draṣṭuḥ*² pratyakṣo*³ 'haṃ devadatto ,haṃ yajñadatta iti (III. 2, 10).

*¹ U は ca を欠く。*² C は dr̥ṣṭa- とする。*³ U は draṣṭuḥ pratyakṣo の代りに dr̥ṣṭam anvakṣam とする。

〔訳〕 (問) 〈私はデーヴァダッタである。私はヤジュニャダッタである。〉と(いうことばが) 観者(である自我)を感官知する。

〔註記〕 dr̥ṣṭa-pratyakṣo という C の読み方は、dr̥ṣṭa- が理解しにくい。このストトラで論難者が〈自我は感官知される〉と主張していることを記憶しておく必

要がある。

devadatto gacchati viṣṇumitro*¹ gacchati 'ty*² upacārāc charīra*³-pratyakṣaḥ (III. 2, 11).

*¹U viṣṇumitro の代りに, yajñadatto とする。*²T. C は, ca を挿入する。*³U は charīra- の代りに charire とする。

〔訳〕（答）〈デーヴァダッタが行く。ヴィシヌミトラが行く。〉という（ことば）は譬喩的用法であるから、（自我でなく）身体を感官知するのである。

〔註記〕 このスートラを C は論難者の説として、U はヴァイシェーシカ説としているようである。ところで、前のスートラは yadi を含むので論難であることは確実と考えられる。そこで〈自我は感官知される〉と主張し、このスートラで〈身体が感官知される〉と主張するのだから、恐らくは U の解釈が正しいのであそう。「進行を述べる〈行く〉という語と共に用いられるから、〈デーヴァダッタ〉という語は身体を述べていると確定される。何故なら、自我には進行はあり得ないからである。故に、〈私〉という語もまた、身体についてのみ（用いられる）。何故なら、デーヴァダッタという語と共に用いられるからである。」(C)

sandigdhas tū 'pacāraḥ (III. 2, 12).

〔訳〕（問）しかし、譬喩的用法は疑わしい。

〔註記〕 このスートラを C はヴァイシェーシカ説とし、U は反対者の説としている。「〈デーヴァダッタ〉という語と同じものを基体としていから、〈私〉という語が身体に譬喩的（に用いられている）という（説）は疑わしい。身体は自我の補助者であるから、自我を述べるものとして〈私〉という語が譬喩的に述べられたのか、それとも、本来の意味で身体を述べるものであるのか。従って、〈私〉という語が身体・自我のうち（のどちらを意味する）か決定されない。」(C)

aham iti pratyag-ātmani bhāvāt paratrā 'bhāvād arthā-'ntara-praryakṣaḥ (III. 2, 13).

〔註記〕 このスートラは通常 C に従って「〈私〉という語は個我に存在するのだから、（個我）以外のものに守在しないので、（身体とは）別のもの（即ち自我）を感官知するのである。」という意味であるとされている。ところで、スートラ III. 2, 10 で〈自我は感官知される〉というのは、論難者の主張であるとされている。また、III. 2, 11 の〈（実際は）身体を感官知する〉というのがヴァイシェーシカ説であるとするなら、このスートラの arthā-'ntara は身体でなければならないことになる。Praśastapādabhāṣya § 44 (ātman 章) にも、「自我は感官知されず、

推論される。」と明言されている。

では、この III. 2, 13 は一体どう解釈すればヴァイシェーシカ説として正しいここになるのであろうか。pratyag-ātman という単語は、辞書に依れば、通常〈個我〉を意味する。ヴァイシェーシカ・スートラでは二度出て来て、もう一箇処は III. 1. 14 の pravṛtti-nivṛtti ca pratyag-ātmani dṛṣṭe paratra liṅgam iti 「活動開始と停止とは、各自の ātman に見られるから、他者（たる自我存在）の証相である。」である。この pratyag-ātman は C に śarīra と註釈されている如くに解すべきであって、〈自我 ātman〉と解することは不可能と思われる。さらに、ātman という単語を身体という意味で用いることは、辞書にも例が出ているし、一般に知られている。ヴァイシェーシカ・スートラでも、V. 1, 6 の ātma-karma hasta-saṃyogāc ca の ātman は、註訳 (śarīraikadeśa, C; śarīrāvaya-para, U; śarīra, T) の示すように、〈身体〉を指していることの明瞭である。古くヴァイシェーシカ・スートラで ātman は運動するという思想があったとする解釈は、上引の III. 1, 14 で困難となるだろう。

このように、もしも pratyag-ātman が〈身体〉を意味することがあるならば、あるいは、ヴァイシェーシカ・スートラでは〈身体〉の意味に用いると考えてよければ、III. 2, 13 の訳は次のような意味となって、前後のつじつまが合うと思われる。

〔訳〕 (答) 〈私〉と (ということば) は、身体に存在するのだから、(身体) 以外のところ (である自我) には存在しないので、(自我とは) 別のもの (である身体) を感官知するのである。

na tu śarīra-viśeṣād yajñadatta-viṣṇumitrayor jñāna-viśeṣaḥ* (III. 2, 14).

* は U jñāna-viśeṣaḥ の代りに jñānaṃ viśayaḥ とする。

〔訳〕 しかし、ヤジュニダッタとヴィシヌミトラとの身体に差異があるからといって、(自我に関する楽等の) 認識に差異があるわけではない。

〔註記〕 「認識というのは、感官に受け入れられる楽・苦等の自我の属性を暗示する」U 「楽等に関する認識」C。但し、C の解釈によるとスートラ全体は「しかし、身体の差異の故に、ヤジュニダッタとヴィシヌミトラについて、(楽等の) 認識の差異があるが、(〈私〉という認識はそのようには差異が) ない。」という意味になるようであるが、スートラ本文をこのように読むことは、やや困難と思われる。

次に、VIII. 2 を C は mana ātmā ca とし、U は tatrā 'tmā manaś cā 'pr-

atyakṣe とする。ところで、直前のスートラが *dravyeṣu jñānaṃ vyākhyātam* (VIII. 1) 「認識作用は実体（を説くところ）で解説された。」とあるので、C の「心と自我とが（認識作用の原因である）。」という読み方よりも、U の「この（認識作用の四原因の）うち、自我と心とは感官知されない。」という読み方がよい。スートラ III. 1, 13; V. 2, 16; IX. 25 で認識作用の原因は、自我と心と感官と対象との四者であると明言しているので、自我と心とのみが原因ではないからである。

最後に、IX. 13 以下はヨーガ行者の感官知について論じているが、そのところを検討する。

ātmany ātma-manasoḥ saṃyoga-viśeṣād ātma-pratyakṣam (IX. 13).

「（ヨーガ行者は）自我における自我と心との特殊な結合から、自我を感官知する。」

*tathā dravyā-'ntareṣu pratyakṣam** (IX. 14).

*C *pratyakṣam* はを欠く。

「他の諸実体についての感官知も同様である。」

ātme-'ndriya-mano-'rtha-sannikarṣāc ca (IX. 15).

*U はこのスートラを欠く。

「また、自我・感官・心・対象の接触から（微妙・隔離・遠離等の諸物について、感官知がある）。」

*asamāhitā-'ntaḥkaraṇā upasaṃhṛta-samādhayas teṣāṃ ca** (IX. 15a).

*C はこのスートラを欠く。

「内官を専注しない人達は、心統一を放棄した人達である。そして、彼等には（神通力がある）。」

tat-samavāyāt karma-guṇeṣu (IX. 16).

「そ（の実体）に内属するから、運動・属性について（感官知する）。」

スートラ IX. 16 の *tat-* は、註釈並びに VIII. 4, (*guṇa-karmasu sannikṛṣṭeṣu jñāna-niṣpatter dravyaṃ kāraṇam* 属性・運動が感官と接触した時、認識作用が発生する原因は実体である) を参照するに、*dravya* を指すと考えられる。即ち、ここでは IX. 14 に *dravya* の語があるから、IX. 16 と IX. 14 とは直接結びつくと考えべきであろう。そして、IX. 15 と IX. 15a とはいずれも、ヨーガ行者ではなくて、通常人の感官知を述べていると解し得る。特に、隔離・遠離の諸物については、感官と対象との接触はないのだから、C の説明は理解し難い。また、心統

一を放棄した人に神通力があるとする U の説明も、突然神通力が出てくるので、何となく不自然である。ヨーガ説によれば、ヨーガ行者は心統一せる人であり、彼等に神通力 (siddhi) があるのだから、心統一を放棄した人に神通力がある筈がない。従って、IX. 15 と IX. 15a との 2 スートラは、何らかの都合であやまって挿入されたものと考え度い。

追補 tad-vacanād āmnāya-prāmānyam (I. 1, 3) の tad- について。Praśastapāda-bhāṣya § 122 (Viz SS. p. 258) に āmnāya-vidhātṛṇām ṛṣinām, 「聖典を整えた諸仙人に」とあるから、tad が ṛṣi (仙人) を指すことは明白である。

〈キーワード〉 Vaiśeṣikasūtra, pratyag-ātman, 註釈書の難点。

(同朋大学教授・文博)

— 新 刊 紹 介 —

佐々木教悟著

『インド・東南アジア仏教研究Ⅲ インド仏教』

A 5 版・325 頁・定価 8,300 円
平楽寺書店・昭和 62 年 12 月 8 日刊